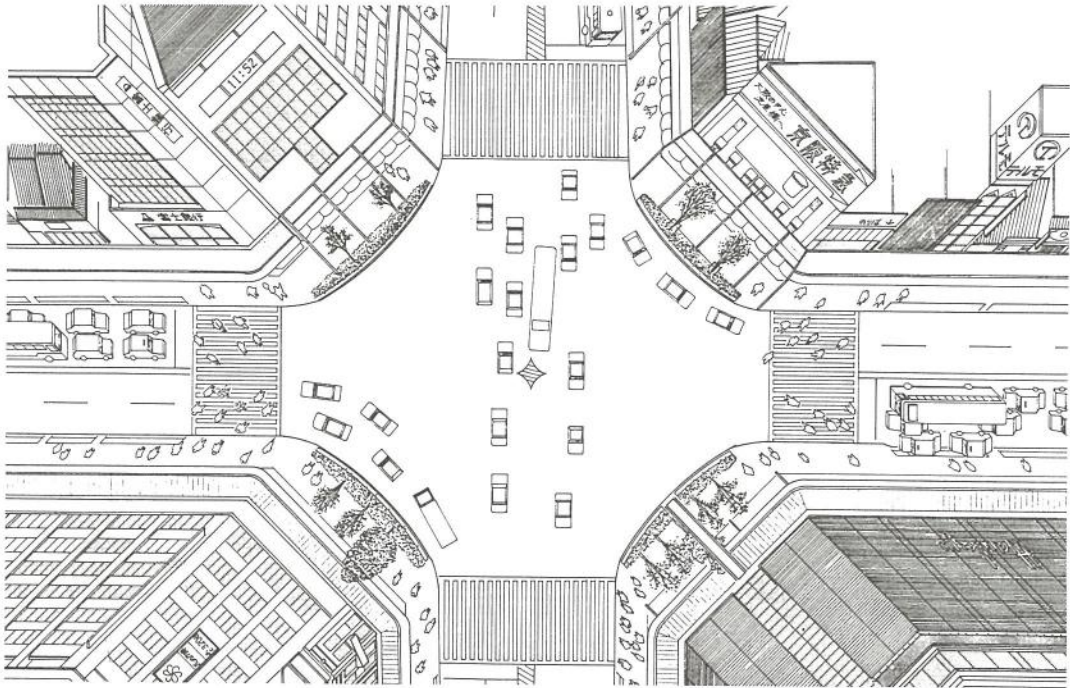


# アルパック ニュースレター

地域計画・建築研究所

## 迎春

平成2年元旦



移りかわる京都・四条河原町。ここが現在のよう姿になったのは意外と新しい。（「新・都の魁」が紹介しています）

### アルパック ニュースレター もくじ

- あけましておめでとうございます..... 2
- 妄想の博物館..... 5
- 公園いろいろ..... 8
- '89年日米沿岸域セミナーについて..... 10
- 第13回全国町並みゼミの京都開催..... 10
- 海外スキー・レポート..... 11
- “アイアンシティ”の転換..... 11
- 国際花と緑の博覧会と鶴見緑地..... 12
- 新刊旧刊書評紹介
  - 「新・都の魁」..... 14
  - 「都市の魅力」..... 15
- まちかど..... 16

# No. 39

あけまして おめでとうございます

今年もよろしくお願い致します。

代表取締役会長 三輪 泰司

21世紀の最後の10年にさしかかりました。今年はや時代論の盛んな年になるでしょう。アルバックでは年頭にあたり「いま、世の中は乱世である」と時代認識をしました。今世紀を通じて支配してきた権威・体制・枠組・価値などが揺らぎ、改革の波が起っています。昨年の初めに提起しました「国にも、企業にも個人にも、羅針盤としての、世界に通用するアイデンティティと論理」が求められると予感したことが現実味を帯びてきました。

「民度」とメキキ 昨年はシンポジウム・ブームでした。時代の或いは地域の進路を求める類のディスカッションに参加させて頂き、とりわけ「京都」を集中的に議論して、勉強になりました。

圧倒的に都市に住む人が多くなり、都市と農村のありかた、その文化を見直す時代になっているようです。1200年も都市であり続けている京都は、都市での暮らし方と農村との共生において、最も先進的であります。矛盾や否定的な面でも先進的であります。

京都が我が国の文化的首都であり続けてきたわけは、まちの中にビルトインされている洗練の機能であるといえます。それは批評であり批判精神であります。良いものを見分け見つける眼力です。羅針盤を持つことです。

町や村の将来を描くこととは、結局のところ、まっとうなものといかがわしいものを見分けることであり、まちづくりとはそういうメキキのできる人を如何に多く見つけ、増やすかであります。あまりいい言葉ではありませんが「民度」を高くすることと思います。

ことしも直しくご支援・ご鞭達をお願い申し上げます。

代表取締役社長 金井 萬造

新年おめでとうございます。昨年7月の新体制移行から皆様方への御挨拶が遅れ申訳ありません。本年もよろしく申し上げます。

本年は、内外に一步前進したいと思います。

90年代ビジョンづくりと業務水準の向上

90年代のはじまりの年にビジョンづくりをし、全社員で共通の目標に向けて努力します。技術水準や技術者の生きがい、社会的役割の面で少しでも向上・前進するようにしたいと思っています。

のろい一步でも着実に歩を進めたいと思いますので御支援・御指導をお願いします。

情報発信と人的ネットワーク化の努力

国際化、情報化の進展に対して、新しく設立したアルバックインターナショナルとも協力して、時代に合った情報発信や情報交流に力を入れます。国際的取組み、海外調査企画、日本各地の情報発信に努力し、人と人のネットワークを大切にし、交流の中で皆様方との御交誼を深めさせていただきようお願いします。

内部組織強化と事務所環境の改善

社会的役割や皆様方の期待に少しでも対応させていただくためには、内部組織の強化、環境の改善が是非必要であると考えています。

5月には大阪事務所がO B Pへ移転します。労働環境の改善などに取組みます。皆様方を気持よくお仰えできる空間づくりと催しを企画しています。合わせて所員のホスピタリティの向上に努力します。

6月には第13回全国町並みゼミー京都大会が開かれます。昨年のウォーターフロント・ゼミ、「新・都の魅」への協力に続いて、職能奉仕の精神で、ゼミの成功に力を入れます。

以上のような抱負を持っていますが最後に皆様方の御健勝と御発展をお祈りします。

京都事務所長 山口 繁雄

京都都市圏は、「建都1200年」を迎えようとしている京都市を中心として、今、発展の気運を大いに高めています。

京都市では、「国際交流会館」「京都リサーチパーク」が建設され、「地下鉄東西線」も起工されました。府南部では、「関西文化学術研究都市」の建設が軌道に乗り、北部では「丹後リゾート構想」が具体化に向けて取組を強めています。また、滋賀、奈良、三重県等においても、各種の地域開発やまちづくり計画が多様に展開されつつあります。

社会経済の「成熟化」と「内需拡大」の同時進行によって、都市計画や建築計画もいよいよ多様で高度な対応を迫られています。京都事務所では、所員一同が、地域に根をおろし、世界に視野を広げ、専門分野を磨いて、地域の人々の生活・文化の向上のために、いっそう積極的な役割を果たしていきたいと考えています。

今年もどうぞよろしくお願ひ致します。

大阪事務所長 杉原 五郎

1990年代を向かえ、時代は大きく動きつつあります。都市や地域をめぐる変化をリアルにとらえて、住みよい地域づくりやまちづくりのための具体的な提案をなしうるかどうかシンクタンクとプランニングコンサルタントに強く求められています。

このような社会的な要請を踏まえて、大阪事務所は、事務所機能の強化と事務所環境の改善を目的として、本年4月末に新しい事務所に移転することにしました。新事務所は、大阪の新しい都心として注目を集めている大阪ビジネスパーク（OBP）です。このOBPの新事務所を新たな活動の拠点として、Think Globaly（地球的視点で考え）、

Act Localy（行動はあくまでも、地域に根ざして着実に）をモットーに、魅力ある事務所づくりに全所をあげてまい進したいと考えております。本年も、引き続き、ご指導とご支援のほどよろしくお願ひ申し上げます。

名古屋事務所長 尾関 利勝

早いもので、アルパック名古屋事務所を開設して今年で満7年を迎えることとなります。2名からスタートして、昨年で8名、今年は多分10名を超えることになりそうです。30代だった私も40代の半ばになりました。全く、皆様のご支援の御かげと言う他はありません。

まちの町医者を自覚し、時代感覚とグローバルな視野を持ちつつローカルな立場で地域を考え、常に必然性と実現性を伴った、そして私自身が仕事をめぐり、様々な方々とかかわりを持った意味のあるコンセプトな仕事をし続けようと努力して参りました。まだまだ不十分と言うおしかりが聞こえてきそうです。この1年、世界と日本と地域の動きは、私達の世界観と感性に否応なく時代の変化を確信させてくれました。アルパック名古屋はまだ社会と地域の要請にお答えするには弱体ですが、この時代と地域に役にたったことを自覚できる仕事をめざし続けて行く覚悟でいます。引き続き応援をお願いします。

東京事務所長 斎藤 侑男

東京事務所は、今年で3年目に入ります。コンサル事務所の手不足の時代、周りの方々の暖いはげましを頂いたこともあって、仕事は徐々に増えてきています。20年も前に、吉村順三先生から、「今の日本では餓死するということはないのだよ」と言われたことを思い出します。あくせくするより、良い仕事をしろということだったと思います。

東京事務所は、創立してからこれまで、「里がえり事務所です」と、肩肘張らずにやってきました。けれども、東京で新たに参加した所員も増えてきます。新しい所員には、西山卯三先生の「コンサルタント論」を読んでもらっていますが、事務所の哲学づくりが、いよいよ大事になっていることを今更ながらに感じています。周りで、ジックリ腰を据えて着実な仕事をしている仲間を見るにつけ、コンサル事務所さえあればよい時代は急速に終わろうとしているように思えます。

アルパック・インターナショナル  
代表 霜田 稔

日本企業の国際化や科学技術の飛躍的な展開に対比して、これらの分野では、我々コンサルタントは、注文請負型になっているようにみうけられます。何とか、国際化や科学技術に関する理念をもったコンセプトのもとに、新しい事業を主体的に創造し、拡大していくことが、求められているように思います。昨年の10月から、アルパック 関連会社として「株式会社アルパックインターナショナル」を発足させ、このような領域にむけてのベンチャービジネスを展開しようと、その基本がためをおこなってきました。取締役には、筑波コンソシアムの河本哲三氏、科学ジャーナリストの飯沼和正氏、国際高等研究所専務理事の河野卓男氏等をお願いし、小さく歩みはじめました。今後、外国人を含め海外のネットワークをもった人材と科学技術・教育研究等のプランニングに興味と野心をもった人材を集め、中期的には国外に事務所を構える体制を整備したいと考えています。当面は、国内の学研都市づくりや科学技術関連都市開発の業務を中心としていきますが、日本の科学技術と人材をバックとして、第3世界の地域開

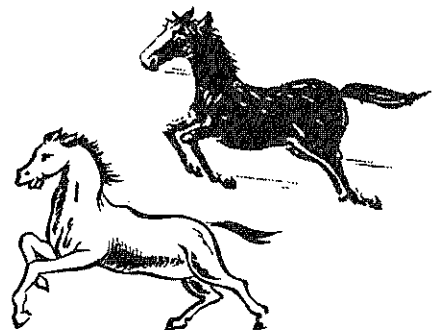
発、科学振興に関与しうる国際的な人脈ネットワークをもったアソシエイト型コンサルタントの連合組織をつくり上げたいと意気に燃えています。今後とも、なにかと御支援のほどお願いいたします。

#### 九州地域計画研究所一同

“遊楽時代の幕あけ”これが21世紀を迎える90年代の九州・福岡のコンセプトです。’89年はプロ野球もやって来たし、よかとびあ博も成功、もちろん“どんたく”、“山笠”も大盛況。ついでに90年代にはユニバシアードもやってきます。ますますソフト化する九州・福岡です。

ソフト化・サービス化ということは、“遊びは仕事の始まり”ということで、してみると遊びがなくて頭を使わないのは仕事でなくて作業だということになります。ところが当方は、「遊び半分で仕事をするではたらん、遊び8分で仕事しようじゃないか」などといいながら、根が作業ずきのせいか「いつまでも電気がついてますなあ」などと冷やかされながら、夜おそくまで作業で苦しんでいます。

遊楽時代の幕あけといった手前、せめて今年には遊び半分とまではいなくても、遊び3分ぐらいにはなりたいものです。よろしくお指導のほどお願い致します。



# 妄想の博物館（上）

## —— 通りすがりのブラジリア ——

糸乗 貞喜

都市づくり 最初の1本の線は

どうして引かれたか

うわさ話としては聞いていても、地図を見たことも写真を見たこともなかったが、とにかく、計画された都市ブラジリアというものを見ておきたいと思ひ足をのぼすこととした。

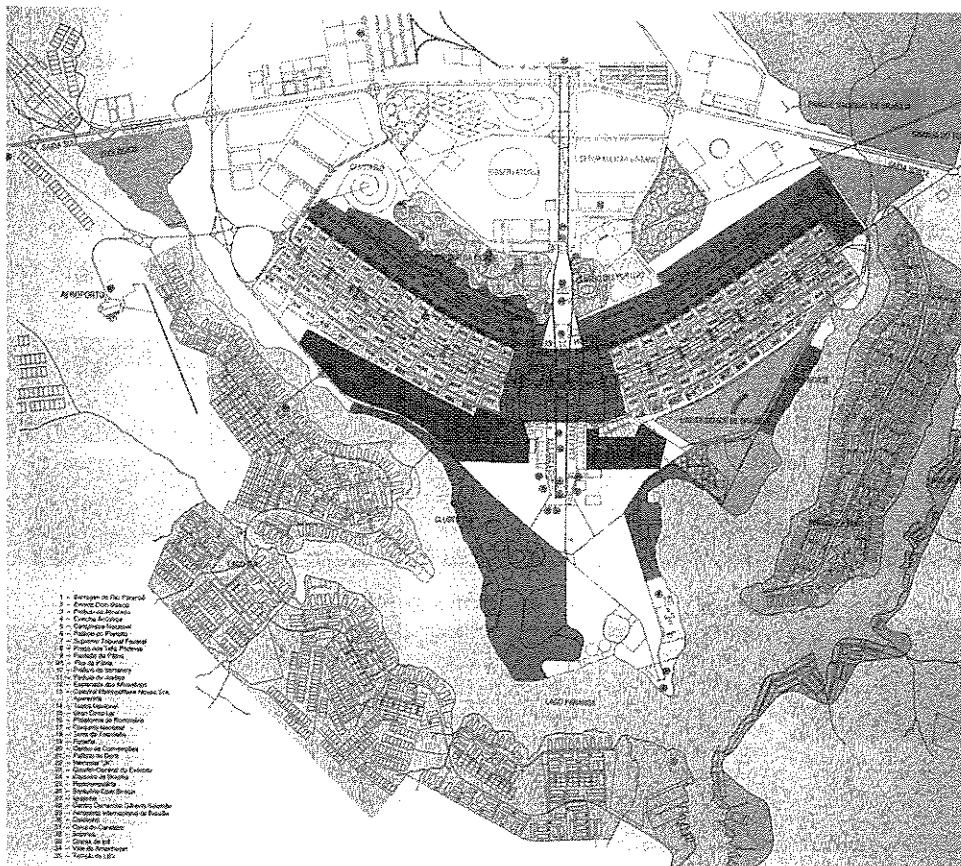
空港について地図をもらって、はじめてキカイな型のプランニングに驚ろいた。「飛行機の型をしている。なぜなのか。方位はどうなっているのかな」と思いながら、京都と奈良の境にある（関西学研都市の近くの）浄瑠璃

寺（九体寺）と、大阪の四天王寺のことが頭をよぎった。

ブラジリアの骨格は飛行機の格好をしている。翼と胴体の交わったところが、街の中心でショッピングセンターなどがあり、頭の方は議会や大統領府などになっている。ひよっとすると、この頭の方角が真南ではないかなと思った。

ご存知の方もあると思うが、浄瑠璃寺は東に薬師如来がおられて、薬をさし出して、シヤバで「気をつけて働き、無事に西方浄土へ

ブラジリア全体図



いけよ」とはげましておられる。そして西の方に九体のアマダさまが、われわれを迎えるために東の方を向いて待っておられる。伽藍配置の中に仏教の、浄土思想の思いがこめられている。それは四天王寺も同じで、門が真西に当たっているので、彼岸の中日には太陽が真西に沈む。私も一度幸運にも春のお彼岸の日に門の真中へ沈んでいく太陽をおがませて頂いた。真赤な夕日が、西の山際（六甲山から摩那山にかけて）をアカアカと染めて沈んでいくさまを見て「なるほどこれが昔の人たちの西方浄土のイメージなのだな」と思った。

あとで考えてみると、変にもったいぶって浄瑠璃寺と四天王寺を思い出すまでもなく、日頃住んでいる京都、大阪、奈良などはすべて東西南北を軸として都市がつけられている。

ブラジルの都市デザインも、何かそのようなものがあるのではないかと思ったが、ブラジリアはそうではなかった。結局、最初の1本の線はどうして引かれたのか、見当がつかなかった。案外、地形でも見て気楽に引いたのかもしれない。

#### 道路体系と人間の心理

空港から車で中心部へ向った。この都市の

テレビ塔から三権広場を望む（左右の建物はホテル群）



テレビ塔から西方を望む（右側に見えるのがサッカー場）



骨格は真東から少し南へふれた方向に飛行機の機首があり、東西に胴体が7キロ、南と北にそれぞれ7キロずつの翼がある。その翼の真中を滑走路のような広さの道路が走っている。そのセンター部分が往復合わせて7車線。なぜ奇数車線なのか。どこかの国の道路のように朝晩のラッシュアワーで片側の車線数が変わったりするためではない。中央の1車線は大統領占用であり、黄色ワク取りしてあって、一般車は通ることはできない。この7車線の道路の外側は広い芝生と植樹帯であり、その外側に沿道部の為の道路がつけられている。通過交通はこの中心部の道路を走る。この道路を猛スピードで翼と胴体の交点へ向った。信号も横断歩道もなく、横断は地下道を通らなければならない。道路はあくまで体系的にできている。ところが人間は体系的な行動様式を身につけてはいない。ラテン系の多いブラジル人は、我々以上かもしれない。

私の見ている間にも、子供連れグループまでがきわどいサーカスをくり返しながらか、猛スピードの道を渡っていく。ガイド氏の説明によるとこの道は事故が多いそうであった。

立派な芝生と植樹帯を見ながら、樹の名前

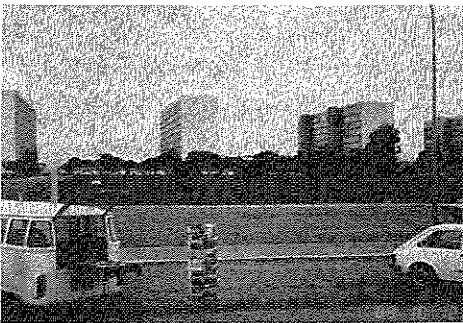
などを聞いていると、ガイド氏が「今は雨期ですからいいのですが……」といった。もともと海拔1,000メートルのブラジリアは乾燥地帯で手入れを怠ると乾期には見る影もなくなるそうである。その手入れというのが、下水処理の汚泥を肥料としてやり、水をかけ続けるということである。人間と機首の先にある人工湖と街路樹が変な形で共存していた。

#### 階段のないアパート

飛行機の機首の方へ向っていくと、全く同じ型の建物が並んでいた。「あれは何ですか」「公務員アパートです」、「窓の外のようなところ取ってつけたような塔がついてますね」、「あれは階段ですよ」、「ないのもありますね」、「もともとあのアパートにはエレベーターだけで階段がなかったのです。火事にでもなったら危険じゃないかという声もあって外側につけたんですよ」という話であった。

先程説明した道路についても、中央の部分には全く側道と関係がなく、一たんこの道路に入ると7キロは走らないと建物へ接近することができなかつたそうである。ガソリンを節約するためにアルコールで車を走らせている国であったからいろいろ苦情が出た。隣のビルに行くにも14キロ走らねばならんようなこともあって進入路でつながれたということである。「なぜそうしたんですかね」、「いや

#### 階段のあるアパート、ないアパート



設計者に聞いたら、そこまで気がまわらんかった、といていたそうですよ」とガイド氏。信疑はともかく、階段の話も含めて、この風景の中で聞いていると、さもあらなんという気がしてくる。

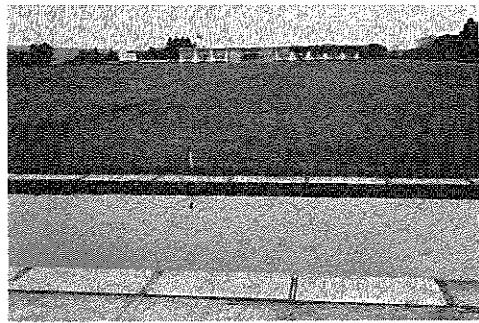
これだけの都市の形を吐き出そうとすると、いかに大きい蚕でも、少々手うすなをとところのある繭になってしまうのかもしれない。まわっているうちにだんだんと興味が深くなってくる。そもそもこのカイコはどこから糸を吐きはじめ、どの順序で繭としていったのか。

大統領府にいくと、いかめしい警備の風景は全くなく、中と外をへだてるのは4~5メートルの池であった。その中には日本から贈られた緋鯉がたくさん、大切に育てられていた。この風景などはやさしい心くぼりの極みのようなもので、デリケートなプラナーの心が伝わって来る。

考えてみると、大統領府の警備が簡単（ハシゴでも持っていけばすぐこの池は越えられる）ということとは、大変なインフレにもかかわらず政情が安定していることの証拠でもあると思った。インフレについてはブラジリアのことでなく、ブラジル全土のことであるのでここでは省くが、先月（'89年9月）のインフレ率は38%ということであった。

（いとりの さだよし）

#### 大統領官邸の前庭の芝生と池



## 公園いろいろ

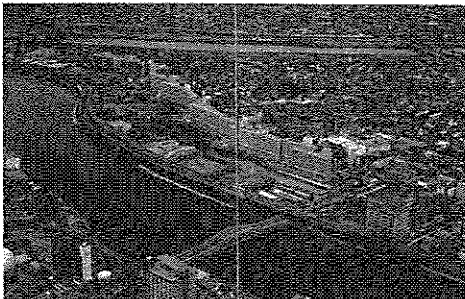
山田 泰造

### はじめに

最近の都市公園は伸長率、多種多様な目的など、非常に多くの面で注視的になっています。昭和46年には総面積 23,600haでしたが62年には 59,400haと 35,800haも増加していますが、これは日比谷公園(16ha)が実に 2,200カ所も新しく生れたこととなります。国民体育大会が開催されるたびに目を見張るような壮麗な総合運動公園が出現しますが、いずれも都市公園として建設されたものです。また今年10月18日早朝サンフランシスコで大地震があり、マスコミは東京は大丈夫かと大騒ぎしましたが、都市災害の恐ろしさと避難地対策はどうかということに集約されています。そこでこの10年にどのような公園が計画され生れつつあるのか、手始めに防災公園から列挙してみましょう。

#### 1 大地震、大火災対策のための公園

・防災公園…… 関東大震災のとき、上野公園50万人を始め、芝・日比谷両公園、浜離宮などに市内人口の7割の人が逃れて助かりましたが、被服廠跡(1.96ha)に逃れた5万人はいたましくも焼死しました。建設省は45年度から防災公園の整備を最重点施策とし、  
白鬚公園



全国130都市約1,600万の人口に対する避難地対策をたてました。目下三大都市圏の既成市街地を中心に10kmを最低限に、歩行距離2km以内に避難地を設けるべく、特に国公有地や工場移転跡地の活用、再開発などの手法を活用して公園を作っています。その代表的事例として東京都江東区白鬚公園があります。47年に着手、防火壁の役割をもった高さ40m(13階建)の住宅棟を連続的に配置し、面積10haの公園を西側にもうけ、8万人の避難広場として利用できるような公園が作られています。

#### 2 様々なニーズに応えるための公園

- ・カルチャーパーク…… 地域の中核的都市に文化活動の中心となる多目的体育館(図書館、集会所、展示ホール等)をそなえた10ha程度の公園。(京都府下での例:福知山市、舞鶴市)、
- ・カントリーパーク…… 地域の中心となる町村の生活改善のため、スポーツ、文化、コミュニティ活動の拠点となる公園。(京都府下での例:和束、加茂、弥栄、大宮、久美浜町)
- ・自然生態観察公園…… 都市での野鳥や植物群落を観察・保護・保全することのできる公園
- ・クラフトパーク…… 地域の伝統的工芸品(陶器、織物)や食品加工品(ワイン、乳製品)の展示・資料室を設け、地場産業の振興に役立つことのできる公園
- ・イベント公園…… イベントを催す場所
- ・広場公園…… 都心部の休息、景観のため



- ・ふるさと公園……都市部と地方部の交流
  - ・ガーデンパーク……市民が土に触れることのできる小農場
  - ・オートキャンプ場……車利用のキャンプ場
  - ・テーマ・パーク……町づくりに見合った。
- これらの機能を持った公園

### 3 健康の増進に役立つ公園

- ・グリーンフィットネスパーク……非競技型のジョギング、水泳等の手軽な運動の行える運動場、プール、体育館、多目的広場、健康運動の指導、相談所を備えた公園。
- ・ウエルネスパーク……スカイスports、グラススキー等に楽しめる施設を備え、週末、広域利用のできる公園

### 4 広域的レクリエーションのための公園

- ・リゾートパーク……総合保養地域や都市型リゾート（工場倉庫跡地等の活用）の整備を推進するための中核となる公園
- ・国営公園……府県の枠を超えた広域的な公園9カ所、国家的記念事業や文化的資産の保存のための公園4カ所。13カ所のうち11カ所が既に開園。

### 5 新しい公園の利用

新しい時代に応える公園として15の名称を挙げましたが今迄には考えも及ばなかった公園が次々と生れてくるのは楽しいことです。建設省公園緑地課長曾田欽嗣氏は「都市公園行政の展望」（「公園緑地」vol 50-2）で「既存公園のリニューアル、高度利用等々が今後の都市公園行政に係る課題である」と述べておられます。公園のリニューアル化での好事例は、滋賀国体、京都国体の主会場となった大津市皇子山、京都市西京極運動公園で府民祭典・アンコール国体



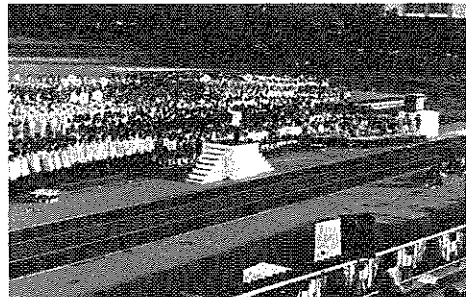
しょう。両者は共に現在敷地内で、全施設を全面改修し国体を無事成功させました。

また高度利用、新しい利用という点では本年10月15日京都府が山城総合運動公園太陽が丘で「府民祭典・アンコール国体」と銘打って、国体関係者全員をはじめ3万人に達する府民ぐるみの祭典を行いました。公園の各所に府の行政部局が一致協力し工夫を凝らし、30カ所の催物会場を設けました。開会式が終了して30分もすると各会場から思い思いの音楽が鳴り出しました。合唱、吹奏楽、鼓笛隊、マーチングバンド、邦楽等々、さらに応援の歓声、ざわめきが加わり100%の公園全体が一瞬にして音の坩堝と化しました。音と人いきれで余計に興奮が倍増し、お祭り気分はいやが上にも高まり、心からお祭りの楽しさに浸っている様子です。大会委員の一人は「ここはハード面がしっかりしているからソフトはいくらでも工夫できる」とはや来年の企画を模索しているようです。

太陽が丘は従来の総合運動公園に一般的に見られる城壁を囲らしたようなスタンドのある競技場を避け、全て掘込式にし、視線を遮る壁をなくし、出入を自由にしたのですが、これが今日のイベントの成功の一因となったと思います。公園の新しい利用方法を見出したと言えましょう。宇治市も11月3日に「市民ふれあい祭」を太陽が丘で行い好結果を得ました。今後の大規模運動公園が実験的な空間をリザーブし、広々とした公園の景観を保つことが大切であるということを示唆するものと思っています。

（やまだ たいぞう）

### 掘込式のグラウンド



## '89年日米沿岸域

## セミナーについて

杉原 五郎

昨年の7月22日(土)の大阪キャッスルホテルにおいて、「ウォーターフロントの市民の利用を考える日米沿岸域セミナー」を都市環境研究会の主催のもとに実施しました。コンサルタント及び弁護士、市民団体等81名の参加をいただきました。

セミナーでは、都市環境研究会の代表、塩崎賢明氏(神戸大学工学部環境計画学科助教授)のあいさつの後、3人の報告者から、報告と問題提起がされました。

最初の報告者であるピーター・グレネル氏(アメリカ合衆国カリフォルニア州沿岸域保全委員会事務局長)からは、カリフォルニア州の沿岸域の実態と保全・管理に係るさまざまな事例や経験がスライドをまじえながら詳細に紹介されました。2番目の報告者である山下明氏(アーバン・システムズ・ラボラトリー・オブ・ポストン代表取締役)からは、アメリカ合衆国の主要都市におけるウォーターフロント開発の経験を踏まえながら、開発に必要な4つのフィージビリティ(事業採算性、政治的合意、技術的実現性、哲学的正当性)の重要性が指摘されました。3番目の報告は、都市環境研究会のメンバーであり、今回の日米セミナーを後援した杉原(地域計画・

## 会場風景



建築研究所)から、都市環境研究会の活動や都市環境及び港湾計画のコンサルタントとしての経験を踏まえて、大阪湾におけるウォーターフロントの現状と開発の動向を明らかにするとともに、沿岸域管理システムの日米比較を行い、ウォーターフロントの市民の利用を進めていく上での課題等について問題提起をしました。

最後に、これらの報告を受けて、報告者及びセミナー参加者との間で約4時間余に及ぶ活発な質疑と討論がなされました。

今回の日米沿岸域セミナーにおいては、日本の大都市圏臨海部とアメリカ合衆国のとくにカリフォルニア州における沿岸域管理システムの違い、その背景的要因としてのウォーターフロントに対する価値観や市民参加システムの違いなどが大きく浮き彫りにされたように思います。今回のセミナー開催を通じて得られた貴重な経験を踏まえて、今後、さまざまなテーマで国際セミナーを企画することにより、日本の都市計画や地域計画を国際的な視野でみつめなおす機会をさらに増やしていくことの重要性を痛感しました。

セミナーへのご協力ありがとうございました。なお、セミナーの前日に予定しておりました懇談会については、準備等の関係から会場と場所などを変更しご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。

(すぎはら ごろう)

## ネットワーク通信 ⑦

## 第13回全国町並みゼミの

## 京都開催

石本 幸良

全国町並みゼミの第13回ゼミが平成2年6月に京都で開催されることが正式に決定されました。昭和49年に全国町並み保存連盟が結成され、昭和53年に第1回全国町並みゼミが開催されました。以後、毎年全国各地におい

で開催され、全国で町並み保存に取り組む住民組織、自治体関係者、研究者などが集まり、開催地における町並み保存問題を中心として、意見交換、情報交換を続けております。

京都は全国の町並み保存、景観保全において絶えず先進都市として位置づけられ、全国の人々から京都ゼミでの意義と成果について期待が寄せられております。第5回の東京ゼミ以外は地方都市での開催であり、京都での開催は大都市における町並み保存についての新しいテーマが焦点になりそうです。

現在、京都で町並み問題に取り組む住民の方や行政の方、大学関係者により、実行委員会を組織して準備を進めております。アルパックとしましても、京都ゼミの事務局としてお手伝いさせて頂くことになりました。

今後、多くの方々に京都ゼミ開催へのご協力を呼び掛けさせて頂きますので、よろしくをお願いします。

□開催日程 平成2年6月23～25日

(いしもと ゆきよし)

## 海外スキー・レポート

西田 昌治

アメリカ・オレゴン州にあるマウント・バチェラーは、標高約2,750mの富士山に似た美しい山です。

このスキー場は、シーズン期間が長く、ベストシーズンが4月下旬から8月と夏まですべれ夏と冬を一度に味わえるわけです。

宿泊場所は、サンリバー・リゾートがグットです。広さは、山の手線の内側がすっぽり入る大きさです。施設内容も充実しており、テニスコート、36ホールゴルフ場、乗馬、カヌー・スイミング(インドア)、ラフティング、フィッシングとアウトドアスポーツが嫌

というほど楽しめます。また、5月ごろは夜10時ごろまで外が明るいので、一日の行動内容が広がります。

宿泊は、コンドミニアムに泊まるのがおすすです。広いリビングに暖炉(6月の夜はまだ寒く暖炉を使うケースもある。)1F、2Fには、バスルームがあり広い広いベッドルームが3室あります。長期滞在型のリゾート地としてはもってこいだと思います。

又食事でも近くのスーパーで買えば安くあがりアメリカ産の肉もそれほど固く無く美味しくいただけます。

(にしだ まさはる)

## "アイアンシティ"の転換

ーピッツバーグを訪ねてー

畑中 直樹

近況というにはやや遅くなりましたが、9月にアメリカの都市経済研究調査に参加しましたので、ここではピッツバーグについて少し紹介したいと思います。

ピッツバーグは、もともと鉄のまち(アイアンビルというのがあるほどです)として栄え、最盛期には人口68万人ほどだったのが鉄鋼業を中心とする基幹産業の衰退により急激な減少に見舞われ、現在は39万人から微減状態にあります。この間、ピッツバーグ都市圏(ピッツバーグ市を含む5の郡)では、鉄鋼業を主体とする産業構造からハイテク化、サービス化を進め、その結果、製造業の従業者数が25.9万人(1975年)から13.4万人(1988年)へと大きく減少したのに対して、サービス業を中心とした非製造業の従業者数は66.8万人から78.6万人へと増加しています。このように衰退しつつあったピッツバーグは、今日、アイアンシティからハイテクとサービス経済を中心とする近代的な都市に大

大きく生まれ変わり、産業構造の転換に成功した都市として全米において高い評価を得ています。こうしたことから、最近になって、尼崎、北九州、室蘭などの産業構造の転換に直面している日本の諸都市をはじめ海外から「ピッツバーグ詣」が続いています。

現在、ピッツバーグ都市圏には、フォーチュン誌による世界上位500社に名を連ねる企業27社が本社を構えて企業活動を展開しています。これは、企業本社の東京一極集中が進む日本では考えられないことで、USスチールやウェスティングハウスといったグローバル企業がピッツバーグ都市圏の経済活性化に果している役割を見逃すことはできません。また、ハイテク関連企業の進出も顕著で、ピッツバーグ市やアルゲニー郡などの地方政府は、研究開発型企業の誘致をさらに促進するため、空港の拡張、ハイウェイの整備、ハイテクパークの開発等を熱心に進めて

います。

このように、ドラスティックな産業構造の転換を遂げ、地域の活性化に成功しつつあるピッツバーグですが、雇用問題の解決や新たなリーディング産業の育成など多くの課題も残されています。中でも、「労働力の構造転換」は大きな課題であり、鉄鋼業の熟練労働者がハイテク産業に対応できない、サービス業における雇用は労働者にとって不安定などの労働力の需要と供給のミスマッチが生じています。デトロイトなどの他都市も同様の問題に直面しており、職能教育のための社会システムやプログラムについての研究、職業訓練施設の整備などが進められています。

(はたなか なおき)

#### 古くからの鉄鋼業地区



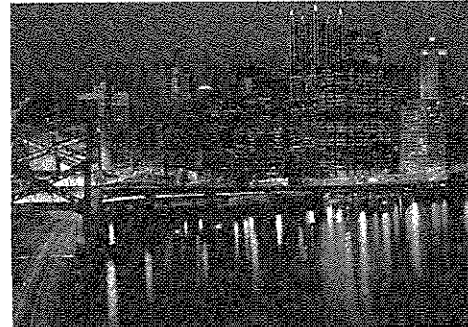
既存工場を利用してインキュベーター企業の入居



#### ダウンタウンの再開発（ゴールデントライアングル）



ゴールデントライアングルの夜景



## 国際花と緑の博覧会と 鶴見緑地

藤田 武彦

平成2年4月から半年間の予定で、大阪では2度目の国際博覧会が開かれる。先日、建設中の会場を見ることができた。

この「国際花と緑の博覧会」は、大阪市と守口市にまたがる「鶴見緑地」を中心に140haの会場を使って展開される。「都市型」「夜型」「生きもの相手」の博覧会というのが特徴とのこと。当然のことながらパビリオンの建設はかなり進んでいた。しかし、それ以上に植物の養生が大変なんだなあと思った。会期中は24時間体制で管理をし、植かえ作業も夜やるとのこと。また土壌に植物があうかどうかともチェックしないといけないという話だった。すでに温室内の植物は入っており、来年の開催を待っていた。なにしろ会期中は、夜10時まで公開していくというからひよっとすると植かえは徹夜ではないかと思う。すでに前売りは900万枚売って、目標の2,000万人入場に自信をもたれていた。

思えばゴミの山の上に地下鉄廃土等をかぶせてできた鶴見緑地が森になり、そして今また大きく生まれかわろうとしていることに感慨がある。

私事だが、実は私は、この緑地のすぐ近くに住んでいる。なにやら周辺の道路建設や街灯の整備などで、大阪市とはいえ辺境のまちみたいだった地域がかわってきた。ただ最近頭の痛いこともある。小さな子供をつれて淀川の河川敷に行くことになった。というのは、鶴見緑地は、公園といっても森のようなところで、子供の放し飼いは絶好の場所であり、また市民農園もあってなかなか気分良かったが、そうした場所を別に求めることとなった。

博覧会が終って違法駐車がなくなることと合わせて、こういうささやかな楽しみが確保されていくことを期待している。

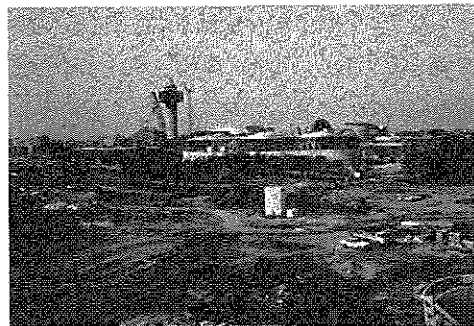
(ふじた たけひこ)

### 鶴見緑地のシンボル

鶴見新山と風車がみえる 一山のエリア



国際展示館ホールA・いのちの塔がみえる  
一野原のエリア



オーガスタショナルゴルフコース12番  
ホールの再現



新刊旧刊書評紹介

京都新聞社編  
杉田博明・三浦隆夫  
京都デザイン研究会

「新・都の魁」

紹介 三輪 泰司

明治16年に「都の魁 さきがけ」という書物が京都で出版されて話題を呼びました。維新後の火の消えたような京都を振るい立たせた京都策一産業振興と都市建設によって活況を取り戻しつつあった街を、商家の姿を中心に銅版画を使っていきいきと描きだしている和綴じ横長のハンドブック型の案内書です。

平安建都1200年は、1994年ですが、本書は今年創刊110周年を迎えた京都新聞が、この書物にならって「新・都の魁」と題して、昭和63年10月28日から、平成元年10月12日まで1年間、毎週木曜日の朝刊で連載したものをまとめたものです。連載は51回でした。

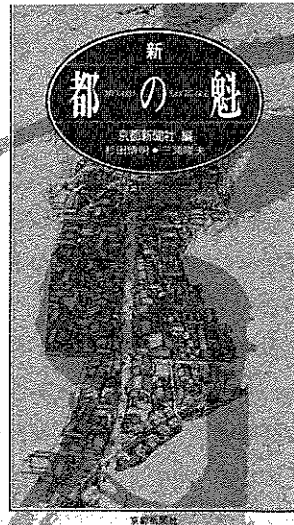
本のあとがきに京都新聞の高橋編集局長が書かれているように“もりあがる京都再生論を踏まえ、新しい世紀に先駆けて、取材班を組み京都の「いま」を内懐から実証してみようという試み”がこの企画でした。

出版を機に、11月28日“KYOTO-NOW”のテーマで、京都出身の作家・秦 恒平さんの講演と記念特別シンポジウムが開かれました。

パネラーは、京都芸術短大の大西国太郎教授・千家十職塗師12世中村弘子さん、建築家グンタ・ニチケさん、そして新・都の魁の作画チーム＝京都デザイン研究会の代表でもある京大建築学科の山崎正史さんで、コーディネーターを三輪が受け持ちました。

作画の原画展と併せて、市民の関心呼びもりあがりました。

1200年にわたる都市生活の中で京都が蓄積し、洗練してきた知恵のシステムは、確か



に恐ろしいまでのものがあります。中村さんは12代の“職と遊と住の同居”の中で培われた「型と好み」を語られました。

さりげない錦小路の魚屋さんは二階に住まいが組み込まれ、静かな奥には茶室があります。中庭にはその前一年保年間一に住んでいた人から託された祠に、朝夕お灯明が上げられています。そこでは、鳥瞰図に内部を描き出す画法と取材によって、型の奥にあるものが記録されています。

秦さんは京都の特性は批判精神にあると語られました。ほんまものとまがいものを見分ける目聴きであります。眼力を養い基準一好み一を今に残す貴重な仕事であると同時に、未来に責任を負うものへの測点を提供して頂いた本です。第1計画部の石本次長が研究会の幹事役としてお手伝いしたこと、北条部長と鶴飼さんも描いていることを付け加えておきます。（みわひろし 代表取締役会長）

## 新刊旧刊書評紹介

日本都市問題会議関西会議編  
都市文化社発行

## 「都市の魅力」

紹介 尾澤 律子

## 編集という名の原稿取り立て屋の語り

以前、編集の仕事について、次のような教えを乞うたことがあります。1つ、何が何でも発行期日を守ること、2つ、間違いがなく、正確であること、3つ、著作者が自由に発言できる空間であること。

今回の本は1と2に関しては笑ってごまかすしかありませんが、3つ目の教えには自信があります。日本都市問題会議関西会議は都市及び都市化に深い関心を持つ人々が個人の資格で集まり、定期的例会のもとで、都市の抱える問題を様々な面から追求しておりますが、この本はその活動記録をまとめた提言集です。約50名の執筆者には字数制限以外はまったく自由に書いて頂けたと思います。こうしてできあがった本を手にすると、京阪神に在住する各界の人々の都市のあり方への意見というより叫びのようなものを感じます。

本の構成は前半部分が都市の歴史、風土、市民気質といった都市のソフト面、後半部分が産業論、高度情報化社会論、都市政策論といったハード面といった2部構成とまとめからなっております。

さて、掲載にあたって、事務局でまとめた原稿等、「てにをは」や連体修飾語の連続等を少し手直ししようとする、結局文全体を直さなくてはいけなくなり、これがなかなか上手にいきません。人間の思考方法は、頭の中に対象物が浮かんで来て、非常に描象的に思考するように思われますが、思考はその人が使っている言語を媒体としていることが多く、日本人の場合、あれはこうなって、こうなるように日本語で思考しています。とす



ると、日本語の構造の特徴が自ずと思考の論理に影響してきます。従って、部分といえど、文章の構成を手直しすることは著作者の論理を変えてしまうことになりかねません。そこで、この本ではすべて原文のまま掲載しましたので、多角的なコンテストと同時にそれに付随した文体も味わって頂けることも隠れた持ち味になっていると思います。

アルパックでも販売しておりますので、ご購入頂ければ幸いです。

(おざわ りつこ)

# まちかど

## 外湯の外観の変遷（城崎）

山村 幸司

改めて紹介するまでもないかと思いますが、城崎町は、兵庫県の北部に位置し、共同浴場である七つの外湯と志賀直哉を始めとする文学で知られるまちです。

この七つの外湯は、町の北部を流れる大鷲川、その兩岸の柳、背後の山、木造三階建ての旅館などととも、城崎のまちの情緒をかもしています。

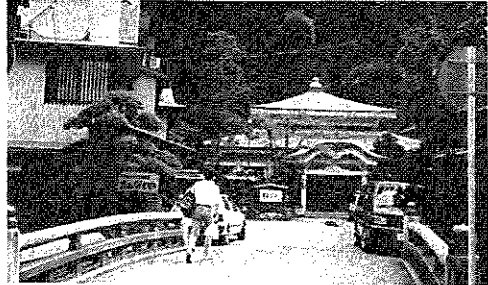
写真上は現在のまんだら湯ですが、この唐破風の入口は大正初期から使われています。しかし、この形態は、一の湯、地藏湯、御所湯で明治期に使われていたものです(写真中)。また、写真下は大正末期の地藏湯です。この頃はRC造のモダンなデザインとなっていますが、現在の姿からは想像もつきません。地藏湯の外観のデザインは、外湯の中でも、その時代において常に斬新で先駆的なものとなっています。

このように、城崎の外湯は、相互に影響し合ったり、新しいものを取り入れることにより、その外観を変化させてきました。外湯は、やはり城崎のシンボルであると同時に、訪れ

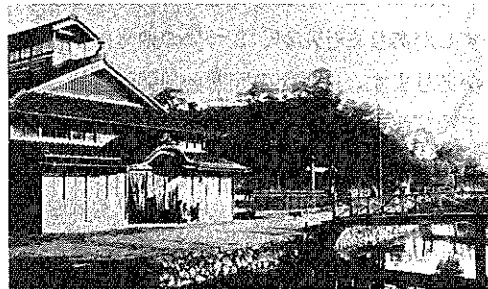
る人々のために、古くから外に対して開かれたものであると言えます。

(やまむら こうじ)

現在のまんだら湯



明治43年の地藏湯



大正末期の地藏湯



## アルパック (株)地域計画・建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

本社	〒600	京都市下京区四條通り高倉西入ル立売西町82 (大和銀行京都ビル8階)	TEL (075) 221-5132(代)
京都事務所			FAX (075) 256-1764
大阪事務所	〒540	大阪市中央区石町1丁目1番1号 (天満橋千代田ビル2号館9階)	TEL (06) 942-5732(代)
			FAX (06) 941-7478
名古屋事務所	〒460	名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 (ツボウチビル2階)	TEL (052) 962-1224(代)
			FAX (052) 962-1225
東京事務所	〒402	東京都港区芝大門2-3-14 (一松ビル1号館402)	TEL (03) 437-3405(代)
			FAX (03) 437-3407
九州地域計画研究所	〒810	福岡市中央区天神1丁目15番1号 (日之出ビル6階)	TEL (092) 731-7671(代)
			FAX (092) 731-7673
㈱アルパックインターナショナル	〒540	大阪市中央区石町1丁目1番1号 (天満橋千代田ビル2号館6階)	TEL (06) 943-7016
			FAX (06) 943-7026
㈱都市居住文化研究所	〒604	京都市中京区御池通東洞院東南角 (京ビル4階)	TEL (075) 252-2231
			FAX (075) 252-2282